2Ap-6　特別養護老人ホームにおける主食及び副食の食物形態と食事状況

女子栄養大　○柳沢幸江，東京都老人研　永井晴美，清雅園　山田美子

【目的】特別養護老人ホームでは個人の摂食能力に応じて、食物形態を変えた供食を行っている。一般に老人ホームでの食事の基本理念は、食欲の低下を防ぎ、食事量を減らすことなく経口的に食物を摂取することにある。そのため粥食や副食の刻み食が日常化している。本研究はホーム入居者のＱＯＬ維持のための食物形態の在り方を探ることを目的に、食物形態の実態と食事状況の関連を検討した。

【方法】対象は埼玉県内の特別養護老人ホーム（清雅園）に1992年４月から1993年３月まで入居していた老人160 人（男50人平均77.9歳・女110 人平均80.9歳）である。調査項目は、食物形態の実態と、食事状況（喫食場所・出前昼食状況）の関連および食物形態の変更状態とその理由を、食事箋や変更伝票によって分析した。

【結果】主食の形態は調査開始の時点で飯食者は32.5％で、残り67.5％は粥食者であった。１年間継続して粥食であったものは50.6％で、粥食者の割合は年齢が増すにつれて多くなった。副食は、飯食者の全てが常食（通常の食物形態）なのに対し粥食者は70.4％が刻み食で、食物形態は粥と刻みが対になっていることが示された。喫食場所は居室とする者が粥食者で多く飯食者の４倍であり、粥食者は身体的にも弱っている傾向にあることが推察された。しかし、対象ホームで月に２回実施される出前昼食での注文頻度及び、注文料理は、飯食者・粥食者で差がなく、食事の中で食物形態の変化をつけることが可能であることが示された。一方、食事変更伝票による食物形態の変更理由は、体調の変化が最も多く次いで歯の治療であった。